

言葉は、もう要らなかった。

そこには、
選ばれた言葉も、
捨てられた言葉もない。

ただ、
通り過ぎた沈黙だけが残っている。

これは、沈黙の美しさではない。
無言であることの価値でもない。

何も言わなかった、
という選択の話でもない。

選ぶ前の層が、
すでに終わっている。

言葉が必要だった時間は、
もう過ぎている。

考える前に、
整える前に、
場だけが先にできてしまう。

そこで言葉は、
補足にならない。
説明にもならない。

入っても、
何も変えられない。

何も語られない場面ほど、
その人は、はっきりと見えてしまう。

言葉が消えたのではない。
もう、届く場所がない。

声も、文章も、
そこまでは来られない。

沈黙だけが、
先に在った。

Edition — 静謐の呼吸
別景：無音

著者：美学思想家 古川玲奈
発行：Raffiné
2026